令和4年度新時代の英語教育推進事業

外部講師の先生による指導・助言

～中学校編～

県教育庁義務教育課

英語教育実践リーダーが指導をいただいている先生方

- ○ 金森　強　先生（文教大学）
- ○ 小泉　有紀子　先生（山形大学）
- ○ 酒井　英樹　先生（信州大学）
- ○ 阿野　幸一　先生（文教大学）
- ○ 太田　洋　先生（東京家政大学）
- ○ 阿部フォード　恵子　先生（CALAインターナショナル）

　英語教育実践リーダーは、年間を通じて様々な視点から実践へのご指導をいただきました。

　指導・助言の一部をご紹介しますので、先生方もご自身の実践を振り返り、授業改善に役立ててください。

言語活動が授業の中心

　単元の最初から最後まで、十分な言語活動があることが大切です。似たような活動を、形・目的を変えて取り組むようにしましょう。その際、言語材料の理解と練習を必要に応じて行いましょう。

単元末の具体的な姿(1/2)

　単元に入る前に、単元末の言語活動やパフォーマンステストでの生徒の発話（記述）を、B基準を意識して3分程度で書き出してみましょう。そうすることで、単元末に至るまで指導すべきこと、活動などの道筋が見えてきます。

単元末の具体的な姿(2/2)

　可能であれば複数人で、気軽に書き出してみましょう。もし、教師が「気軽に」書き出せず悩んでしまうようであれば、課題自体が難しい可能性があります。

即興で話すこと

　最初から正確さや流暢さを求めず、繰り返し活動で発話させながら、中間指導などで表現を確認し、再度挑戦するという流れが大切です。

（例）教師の自己開示（モデルを示す）　→　活動

　　→　中間指導　→　相手をかえて再度活動

即興で話すこと

　即興でのやり取りでは、既習事項を用いて生徒が言いたいことを伝えようとすることが大切です。「型」を意識しすぎると、「意味（内容）」に意識がいかなくなってしまいます。

即興で話すこと

　即興で発表する際に、「メモを作成してから即興で発表する」という流れを、「①まず英語で言ってみる　②言う順番や内容の重要度を考える　③説明するためのメモを作成する」という流れにすることで、メモを原稿にせず即興で発表することにつながるでしょう。

発話の正確さ

　発話の正確さの向上をねらう場合、「一緒に英文を発音する」「教科書に戻って使える英語を確認する」「例文を黒板に提示する」「言えるまで練習をしてから個々の活動に戻す」などの手立てが、生徒が英語で言いたい気持ちをしっかり支援することにつながります。

中間指導

　生徒が英語にしたい表現を全体で共有し、ALTに答えを教えてもらうだけでは、質問者以外は他人事になってしまいます。例えば、自分ならどう言うか考えさせたり、表現を口頭練習する場合、全体で言う練習をしたりすることで、全体の学びにつながります。

中間指導

　コミュニケーションの方略など、中間指導で例を挙げながら共有し、自覚させることで、学び方が概念化され、学びが促進されるでしょう。

（例）やり取りがスムーズにいかない時に

・聞き返す　・くり返す　・確認する

ことでやり取りが充実する。

教師と生徒のやり取り

　教師の発話の中に、生徒とのinteractionを増やしていきましょう。

（例）前時の復習を一方的な説明でなく、生徒に教科書を開かせ、生徒に問いかけて答えさせながら確認する。 → 即興で答える力を育む。

教師と生徒のやり取り

　教科書本文を１回聞いた後、２回目を聞く前に教師が生徒に質問を投げかけるなど、interactionを増やしていきましょう。その際、答えが教科書にないことでも、教師が本文を聞いて疑問に感じたことなどを問いかけてみると、生徒の思考や想像を促すでしょう。

テキストタイプの分析(1/2)

　教科書本文のテキストタイプを分析して、生徒にどのような力を付けたいのかを考えて指導しましょう。

（例）①パラグラフ構成　②比較と対照　③時系列
　　④意見と理由　⑤問題と解決　⑥詳細
　　⑦描写　など

テキストタイプの分析(2/2)

　様々なテキストタイプについて学ぶことで、情報整理の仕方や英語で表現する際の構成など、「思考力、判断力、表現力等」に関わる、「情報を整理しながら考えなどを形成」する生徒の育成にもつながります。

教科書の活用

　例えば、教科書本文が説明文の場合、思いついた文や単語を言うだけの生徒がロジカルな話し方を学ぶよい機会になり得ます。

　また、前に学習した表現について、全体で止めて、教科書に戻って全員で確認することも有効です。

教科書の活用

　教科書内容をインプット（理解）するレベルで終わらず、事実や考え、気持ちなどをアウトプット（表現）する機会を充実させましょう。アウトプットのためにインプットが必要となるような指導、インプットとアウトプットを何度も行き来する指導が大切です。

New Words

New Wordsは、「その単元で初めて出会う単語」で、「その単元内で覚えなくてはならない単語」ではありません。特に、基本語とされる単語は何度も繰り返し教科書に出てきます。「何度も触れる中で最終的に覚えられるように」という意識の持ち方がよいでしょう。

外部講師の先生による指導・助言　～中学校編～

「聞くこと」「読むこと」

①トップダウン…スキーマ（背景知識）を活用して内容・構成を推測しながら理解

②ボトムアップ…単語（音）レベル　→　文レベル

→　意味内容レベルの理解

両方の理解のプロセスが単元・年間でバランスよく活動に取り入れられていることが大切です。

既習事項の活用(1/3)

　生徒が、目的を達成するために「どうするか」を考え、「習ったことが使えるかもしれない」という思考に結びつくように、Small Talkなど、既習事項を気軽に使える時間を設定することも効果的です。

既習事項の活用(2/3)

　既習事項を上手に活用している生徒の発話を全体でシェアしたり、活用しようと努力している姿を紹介したりすることも大切な指導です。既習事項が使えているかチェックリストを作成してもよいでしょう。

既習事項の活用(3/3)

　既習事項の活用になかなか気付けない生徒は、まず「もがく（struggle）」経験をした後に、支援として教科書本文や音声、ALTのモデルなどのinputに戻り、その中から活用できそうなものを探させることも有効です。

マッピングについて

「思考力、判断力、表現力等」を育成するためには、目的・場面・状況に応じてマッピングの方法を考えることが大切です。

（例）情報を結ぶ線の意味を考える（比較、説明、理由…）

情報を比較できるような型を提示する　など

継続的な小中連携

「①何を学んできたか　②どう学んできたか」を把握するとよいでしょう。小学校の教科書の「目次」「単元末の活動」を確認する、小学校で行ってきた言語活動などを確認し、意識的に似たような活動を帯活動でやってみるなど、小中の学びをつないでいきましょう。

教師の支援

個に応じた指導のために、様々な支援の方法を教師同士で考えてみることが大切です。

（例）・言い換える　・単語を文レベルでリキャストする

・具体例を出す　・くり返す　・自分で修正させる

・教科書、既習事項に戻す　・学習形態